

認知文法における事態叙述の在り方
－「事態」をどのように概念化するか－

一般に、Langacker の認知文法では、言語それ自体の問題とそれを使用する言語主体の問題とを切り離すことは不可能であると考え、認知主体の認知能力に基盤を置いた理論構成物を用いた言語現象の包括的な記述に務めてきた。そのため、人間の捉え方(construal)の豊かさに応じて、様々な理論構成物が提案されてきた。しかしながら、実際の研究においては、行為連鎖(action chain)など、ごく限られた理論構成物のみを用いた事象構造の分析が行われることが多いのも事実である。そのような現状では、人間の認知の多様な実態を正しく記述できているか疑わしいと言わざるを得ない。

このような問題意識に基づき、本ワークショップでは、認知主体が事態を捉える際にスコープをどのように定めるか、何をプロファイルするかという焦点の当て方の問題以前の、事態をどのようなものとして捉えるかという叙述の在り方の問題に焦点を当て、認知文法の妥当性を検証したい。その際、事態をモノの属性として捉える属性叙述や行為連鎖以外の捉え方を用いて事態を捉える叙述の在り方など、認知主体の捉え方の多様性と文法の関係をより明らかにする予定である。各発表は次の通り。

① 認知文法における属性叙述の発生プロセス －主題非明示型結果構文の事例を中心に－

本発表では、認知文法の視点から属性叙述の発生プロセスを解明することを目的とする。主たる言語現象として「主題非明示型結果構文」(e.g. **Our new washing machine washes whiter!**)を扱う。Tsushima (2010 等)では、構文特性を検証し、この構文は主語名詞句の属性を示す属性文であることが報告されている。それを踏まえて、本発表ではこの構文は益岡(2008)の「叙述類型論」の枠組みのうち、「属性叙述」に相当すると考える。そして、属性叙述の発生プロセスとして、主に Langacker (1999 等)の次元(plane)モデルを援用することで解明に迫る。具体的には、属性叙述は現実次元(actual plane)から一般化された仮想次元(virtual plane)上で想起される事態だが、そこには直接認知(engaged cognition)から間接認知(disengaged cognition)への移行(cf. Langacker 2008)という認知プロセスが関与しているということが結論として予測される。

② 事象と属性の接点 －難易度を表す形容詞の多義性をを中心に－

英語の Tough 構文は属性叙述機能を担う構文の一つであるが、そこで頻繁に用いられる形容詞(easy, difficult, hard 等)は、典型的な難易度の意味に加え、to 不定詞が表す事象のタイプによっては当該事象の生起頻度の高低を意味することがある。本発表は、この多義現象を適切に説明するには、想定される行為主体の解釈の主体性(subjectivity of construal)に加えて、当該行為者の参与感(sense of participation)という基準も考慮する必要があることを論じる。更に、「形容詞が表す属性概念は当該属性を有する存在体に関わるプロセスと

の関連で特徴づけられるべき」(Langacker 1995:52)という理念に対して本研究の貢献の可能性についても議論していく。

③ 英語属性叙述受動文の合成構造

一般に英語の受動文は、他動性、特にエネルギー伝達の観点から議論されることが多い(Bolinger 1975, Rice 1987)。しかし、**This temple was built in 1221.**のような達成動詞の受動文の存在を考えた場合、被動作主に直接エネルギーが伝達されたか否かだけで受動文の容認性を議論するのは不可能である。寺は「建てる」という行為の受け手ではなく、その行為によって生じた結果だからである。本研究では、**This bridge has been walked under by generations of lovers.** (Bolinger 1975:69)のような異常受動文(peculiar passive)と言われる現象がなぜ可能となるのかという問題に焦点を当て、属性叙述に見られる複合的な事態把握の在り方が複雑な合成構造を生み出す認知メカニズムを明らかにしたい。

④ 能格性からみた脱従属節化現象

本発表の目的は、Langacker (2008:ch.11) で議論されている **absolute construal** という概念の妥当性を形態・統語的に(分裂)能格性を示すエスキモー語の観点から議論することにある。特にデータとして、近年、機能類型論で研究が進められている脱従属節化現象(**insubordination**)(e.g. Evans 2007) に焦点をあてる。エスキモー語に観察される脱従属節化現象の主なタイプを示した後、脱従属節化には言語内的な動機づけが働いているという前提に立ち、Shibatani(1991, 2009) でそれぞれ示されている主題の文法化、名詞化(**nominalization**) の議論を援用しながら、異なるタイプの従属節が用いられる一つの理由として、能格性が関わっていることを提案・議論する。

以上、本ワークショップでは、人間の認知の多様な実態を正しく記述するために、認知主体が事態をどのようなものとして捉えるかという叙述の在り方の問題に焦点を当て、認知文法の妥当性を検証したい。その際、認知文法の理論構成物の潜在的な可能性についても議論する予定である。

参考文献

Akatsuka, Noriko (1979) "Why Tough-Movement is Impossible with Possible," *CLS* 15, 1-8.

Bolinger, Dwight (1975) "On the Passive in English," *LACUS* 1, 57-80.

Couper-Kuhlen, Elizabeth (1979) *The Prepositional Passive in English: A Semantic-Syntactic Analysis, with a Lexicon of Prepositional Verbs*, Max Miemeyer Verlag, Tübingen.

Dixon, R. M. W. (1991) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*, Oxford University Press, Oxford.

- Evans, Nicholas (2007) "Insubordination and its Uses," *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, ed. by Irina Nicholaeva, 366-431, Oxford University Press, Oxford.
- Langacker, Ronald W. (1995) "Raising and Transparency," *Language* 71.1, 1-62.
- Langacker, Ronald W. (1999) "Virtual Plane," *Studies in Linguistic Sciences* 29.2, 77-103.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press, Oxford.
- Rice, Sally (1987) *Towards a Cognitive Model of Transitivity*, Ph.D. dissertation, University of California, San Diego.
- Richardson, John F. (1985) "Agenthood and Ease," *CLS* 21.2, 241-251.
- Rivière, Claude (1983) "Modal Adjectives: Transformations, Synonymy, and Complementation," *Lingua*, 59, 1-45.
- Shibatani, Masayoshi (1991) "Grammaticization of Topic into Subject," *Approaches to Grammaticalization* vol. 2, eds. by Elizabeth C. Traugott and Bernd Heine, 93-134, John Benjamins, Amsterdam.
- Shibatani, Masayoshi (2009) "Elements of complex structures, where recursion isn't: The case of relativization," *Syntactic Complexity*, eds. by Talmy Givon and Masayoshi Shibatani, 163-198, John Benjamins, Amsterdam.
- Tsushima, Yasuhiro (2010) *A Cognitive Linguistic Study of Implicit Theme Resultative Constructions and Their Related Constructions*, Doctoral Dissertation, Hokkaido University.
- 影山太郎 (編) (2009) 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』大修館, 東京.
- 影山太郎 (編) (2012) 『属性叙述の世界』くろしお出版, 東京.
- 柏野健次 (1993) 「easy タイプの形容詞の3つの意味」, 衣笠忠司・赤野一郎・内田聖二 (編) 『英語語法演習 英語基礎語彙の文法』145-154, 英宝社, 東京.
- 益岡隆志 (2008) 『叙述類型論』くろしお出版, 東京.
- 南佑亮 (2007) 「典型的な tough 構文の多義性と主体性について」河上誓作・谷口和美 (編) 『阪大英文学会叢書 4 ことばと視点』91-103, 英宝社, 東京.